

澁江保訳『西洋妖怪奇談』の挿絵と 底本について

——挿絵からみた明治期グリム童話翻訳

西 口 拓 子*

はじめに

1891（明治24）年8月に博文館より刊行された『小學講話材料 西洋妖怪奇談』は、グリム童話の邦訳だが、複数のグリム童話を収録したものとしては、1887（明治20）年4月の菅了法訳『西洋古事 神仙叢話』に続く二番目のものである。

「グリム童話翻訳文学年表」（2000年）には、「本書収録の40話のうち、グリム童話が37話、アラビアンナイトの「アリババと四十人の盗賊」1話、その他2話¹⁾とある。5年後に刊行された「グリム翻訳総合年表」での扱いも同様である。²⁾本稿は、「その他」とされた2話の出所について、そのうち片方が『グリム童話集』からの翻訳であること、またこの翻訳書の底本についても論じていく。

表紙には、「幸福散史澁江保譯述」とある。澁江保は、澁江抽斎の七男で、森鷗外の『澁江抽斎』に資料を提供し、同書の中で嗣子としてしばしば言及されている人物である。1857年に生まれ、共立学舎で学んだ後、教師をして学資を蓄え、1879年からは慶應義塾で学んだ。1881年以降は愛知

*専修大学経営学部准教授

や静岡の学校で教師や新聞記者として働いた。1890（明治23）年3月から博文館のための著作を開始し、多数の著作・翻訳を手がけ、³⁾幸福散史という筆名もしばしば用いている。

さて、収められた40話のほとんど全てがグリム童話を翻訳したものであるのに、『西洋妖怪奇談』という書名であることが目をひく。

明治時代に西洋の「奇談」を求める傾向があったこととも関係しているだろうが、⁴⁾200話もの童話と10話の聖者伝⁵⁾からなる『グリム童話集』から、一体どのような話を選択され翻訳されたのだろうか。

確かに『グリム童話集』の最終版にも残酷な話が含まれていることは、良く知られている。例えば、「ねずの木の話」(KHM47)⁶⁾は、刊行当時にも、その残酷さゆえにグリム兄弟の友人アルニムが、話を削除することを勧めていた話である。神話的世界を彷彿とさせる話ではあるのだが、母親が義理の息子を殺害し、その肉を調理し、夫に食べさせる場面があるからだ。この話は『西洋妖怪奇談』には「巴旦杏」というタイトルで収められているが、息子の肉が調理される場面は削除されている。

同様に、「フィッチャーの鳥」(KHM46)は、「青髭」⁷⁾の類話であり、花嫁の連続殺人が行われる話である。これは「羽郷の處女」として収められているのだが、長女と次女が残酷な方法で殺害される場面は、餓死するよう部屋に監禁されるだけに変更されている。グリム版では、切断された身体を元通りに並べ置くと二人は蘇生するのだが、澁江訳では、餓死の寸前に救出されることになっている。

さらにグリムの「灰かぶり（シンデレラ）」(KHM21)では、最後に悪人には残酷な罰が与えられている。17世紀末フランスのペローによる「サンドリヨン」では、最後にヒロインが姉たちを許しているのとは対照的である。というのも、グリム版では、姉ふたりは、義妹に意地悪をした罰として、鳩によって目をつつき出されてしまうのである。澁江の「シンデレ

ラ嬢奇談」では、ここは、姉たちは「悪事の罰として、^{めし}盲と」なるだけに変更されている。⁸⁾

こうした残酷な場面は、「妖怪奇談」という名のもとでは削除する必要はないとも思われるのだが、なぜ和らげられているのであろうか。

そこでまず着目するのは、本書での登場人物に、シンドレラ（第18話）、ジヨン（第5話）、ベンジヤミン（第21話）等と英語の名が付けられていることだ。このことから、澁江が翻訳の際に英語訳を用いていたことが推測される。そもそも、明治期に出された初期のグリム童話の邦訳は、英語からの重訳が多数を占めていたのであった。

澁江に4年先んじて刊行された『西洋古事 神仙叢話』は、Paul 版を翻訳したとみられるが、⁹⁾澁江も同書を用いた可能性はあるのだろうか。

Paul 版をはじめとした19世紀の英語訳には特徴がある。当時の価値観に合わせて話が取捨選択されただけでなく、話の内容も変えられていることが少なくないのだ。¹⁰⁾

グリムの「忠臣ヨハネス」(KHM 6)には、忠実な家臣が王妃の胸から血を3滴吸い出す場面がある。さもないと王妃の命にかかわるためである。これは当時のイギリスの読者には受け入れ難いものであったため、血を吸い出す箇所は、より差し障りのない部位——肩や指——に変更された。この変更に伴い、王妃の指から血を吸い出しただけで、なぜ忠臣に死刑の判決が下されるのかは説明されないままとなってしまったのだが。(Sutton S. 67)

ここはドイツ語テキストでは動詞の saugen が使われているため、王妃の血を口で吸い出し、吐き出すわけである。しかし『西洋妖怪奇談』では、「右胸より三滴の血を絞り、之を投棄」(澁江 56頁)と、曖昧な表現とされている。ほぼ同時期の1888(明治21)年4月に『女学雑誌』に掲載された巖本善治訳の「忠實なる家来」においても同様で、「右の胸の血を取」

る、「絞り」となっており、¹¹⁾口で吸うという艶かしい状況は避けられているが、どちらの翻訳においても「胸」からという点は変えられていない。

一方で、Paull 版においては、ジョン（ヨハネス）が3滴の血を吸い出す箇所は、右肩とされる。¹²⁾よって、澁江が、同書を底本としつつも「胸」からと訳したとは考え難い。

19世紀の英語訳のうち、ここをグリムの原典に忠実な翻訳をしたのは1884年の Margaret Hunt¹³⁾のみだという。(Sutton S. 67) 前述の「ねずの木の話」において父親が息子の肉を食べてしまう場面も、19世紀の英語版では変更されることが多かったのだが、ここを忠実に翻訳したのはやはり Hunt が初めてだったという。

しかし Hunt 版に拠るとの決定的な証拠はなく、テキストを手がかりに、澁江が用いた英訳本を特定することは困難であったが、思わぬところに糸口が見つかった。それは、『西洋妖怪奇談』に付けられた挿絵であった。

『西洋妖怪奇談』挿絵の特徴から

『西洋妖怪奇談』には、挿絵画家の名は明記されていないが、ほぼ全ての話に一ないし二枚の挿絵が付けられている。まずは次の三組の挿絵を比較してみたい。¹⁴⁾

この三組の絵が酷似していることは言及するまでもないだろう。左側に配置した図1～3が、『西洋妖怪奇談』に付けられた挿絵である。右側の図I～IIIは、Edward Henry Wehnert (1813-1868年)による挿絵で、これらは1853年にロンドンで出版された英語版に付けられたものである。翻訳者名は記載されていないため、¹⁵⁾本稿では、以降は Wehnert 版と記す。

なかでも図3がその類似点に気付かせてくれたものであるが、まずは順に見ていきたい。図1は、第33話「藁と石炭と蠶豆との話」(KHM18)へ

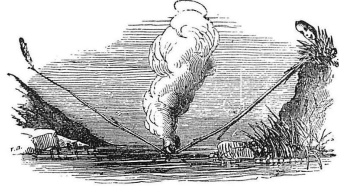
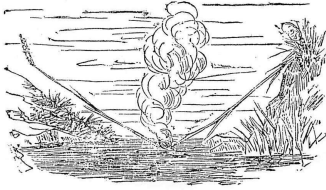


図1 第33話「藁と石炭と蠶豆との話」

図I KHM18「藁と石炭とそら豆の話」

(本稿で使用する図版は全て筆者蔵である。注14参照)

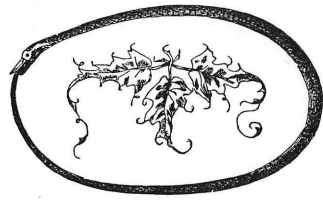
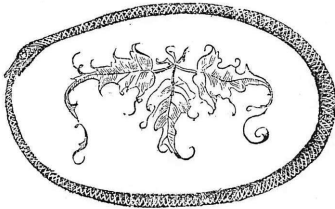


図2 第14話「蛇の三葉」

図II KHM16「三枚の蛇の葉」



図3 第10話「戦慄とは如何なる事かを知らんとて旅行したる人の話」

図III KHM4「こわがることを覚えに旅に出た男の話」

の挿絵である。連れだって出かけた藁と炭とそらまめが、川に行き当たる。そこで藁が橋となるが、炭が渡る途中で立ちすくんだため、藁が燃えてしまう。その場面を描いたものだが、描線の数以外は、ほぼ同じである。

図2は、第14話「蛇の三葉」(KHM16)の挿絵である。この話では、ど

ちらが先に死去した場合も、遺された者も共に生き埋めにされるという条件で、貧しい男が王女と結婚する。そうして生き埋めにされた若者は、墓の中で、蛇が三枚の葉を用いて死んだ仲間を蘇生させるのを目にする。描かれているのはその葉で、それを囲む輪のようなものは蛇である。

図1と2は、グリム童話の内容を反映したものであるが、これらは Wehnert の絵を見ることなく描かれたとは考えられないほどに酷似している。

一方で、図3は第10話「戦慄とは如何なる事かを知らんとて旅行したる人の話」(KHM4)への挿絵であるが、ここで描かれているのは、妖怪であろうか。恐い思いを体験させるために、知り合いが妖怪に化ける場面はあるが、これに関しては「白いもの」(Grimm S. 43)との描写がなされるのみであるため、図Ⅲは Wehnert が想像で描いたものだろう。二人の画家が同一のイメージを抱くことは想定できず、ここでの日本の挿絵への影響関係は否定することができない。

こうして両書の挿絵を詳細に比較していくと、この他にも良く似た挿絵が幾つも見つかった。本節ではそのうちの特徴的なものを紹介したい。なお図Ⅳ、Ⅵ、Ⅸ、Ⅹ、Ⅺは、筆者の所蔵する版ではフルページのカラー刷りである。

図4は、第4話「驢馬の甘藍」(KHM122)で9羽の鳥が「願かけマント」(羽織ると願った所に行くことができる)を奪い合う場面である。これも全体的に良く似ている。

以降紹介する例は、多少のアレンジが加えられているものの、Wehnert からの影響がみられるものである。

図5は、第22話「嫁の擇ひ方」(KHM155)の挿絵である。三人姉妹のチーズの食べ方を見て、最も堅実な娘を結婚相手に選ぶ男性の話である。両端の男女の顔の向きが異なるほか、左端に描かれた男性が、日本版では椅子に座っておらず、高所から姉妹を見定めているように見える。Wehnert



図4 第4話「驢馬の甘藍」



図IV KHM122 「キャベツロバ」



図5 第22話「嫁の擇ひ方」



図V KHM155 「嫁選び」

の絵では、男は一緒に食卓を囲み、それとなしに観察を行っている。

図6は第23話「森林中の家」(KHM169)の挿絵で、樵として森で働く父親のもとに、娘が昼食を持参する場面である。図6と図VIでは絵から受ける印象は異なるが、服装、背景の鳥などの類似点が明らかである。娘の背後に無数の鳥が描かれているのは、父親が目印として撒いた豆等を鳥たちがついばんでしまう話であるためである。

図7および図VIIでは、一見すると同じ場面が描かれているかのように見える。しかし、図7では袋に入っているのが1名だが、図VIIでは、運ぶ男の顔が地面を向いており、袋には2名が入っているように見える。これらは「フィッチャーの鳥」の挿絵で、姉妹を順々にかどわかし、殺害する男の話で、これが「青髭」の類話であることは冒頭でも言及した。しかし、



図6 第23話「森林中の家」



図VI KHM169「森の家」



図7 第11話「羽郷の處女」



図VII KHM46「フィッチャーの鳥」

末娘が機転を利かせ、姉ふたりを蘇生させたばかりか、結納の黄金と信じ込ませて、男に家まで送り届けさせるのである。Wehnertの絵には袋にGOLDと明記されていることから、この場面が描かれていることは明らかだ。黄金と信じて、姉ふたりを男が懸命に運んでいるところである。日本の挿絵画家は、図Ⅶを物語の導入部での娘をかどわかす場面として模写したようで、図7を冒頭に置いている。GOLDを単なる図柄とみなしたのかもしれない。

図8と図Ⅷにおいては、類似点は顕著でないが、二番目の男のみ共通して黒色の長靴を履いている点に着目できる。同じ場面は、他の英独の挿絵画家、例えばGeorg Oberländer（1960年）やPaul Hey（1916年）も描い



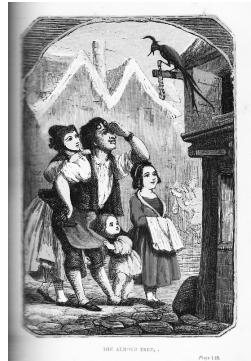
図8 第38話「七名のスウェビア人」



図VIII KHM119 「7人のシュヴァーベン人」



図9 第26話「巴旦杏」



図IX KHM47 「ねずの木の話」

ているが、服装は様々である。そして図8の服装には、Wehnertからの影響が見られるのである。ただし、ここでは日本の挿絵のほうが躍動感を感じさせるものとなっている。

図9と図IXには、本稿の冒頭でも言及した「ねずの木の話」の一場面が描かれている。向きは対称的だが、全員の服装、鳥の姿だけでなく、父親の肩に手をかけている母親など、構図にも類似点が見られる。本文中では、鳥に関する描写は、「美しい鳥」「真紅と緑の羽を持ち、首の周りは純金のように輝き、目が星のように顔の中できらめいていた」(Grimm S. 244f.)



図10 第19話「鷺鳥娘」



図X KHM89「がちょう番の娘」

とあるのみで、尾が長いか否かは不明である。澁江訳の描写にも「一羽の麗しき小鳥」「其羽色の赤く緑なる、其喉の周囲の金色なる、其目の煌々たる」（澁江179, 182頁）とあるのみだ。図9もまた Wehnert の絵を目にすることなく描かれたとは考え難い例の一つである。

図10は第19話「鷺鳥娘」(KHM89)の挿絵だが、ここでも全体的な印象は異なるが、図Xと画面構成などが良く似ていることが分かる。王子の許嫁である王女は、侍女に脅されて入れ替わり、キュルトヒエンと共にがちょうの番をすることになる。口を利くことのできる馬のファラダは、殺されてしまうが、王女は、その首を門の下にくぎで打ちつけてもらう。朝晩にがちょうを連れてそこを通る際、王女とファラダは言葉を交わす。その場面が描かれている。がちょう番に身をやつした王女の後ろに描かれているのがキュルトヒエンで、表情以外はほぼ同じである。Wehnertの描いた図Xのほうが、王女がファラダに親密に話し掛けている感じがより表現されている。

図11は、第37話「鐵人」(KHM136)の挿絵である。ここで描かれているのは、三日間にわたり催された祝宴で、王の娘が投げる金のりんごを参加者が奪い合う場面である。三つとも獲得するのは主人公の男である。向



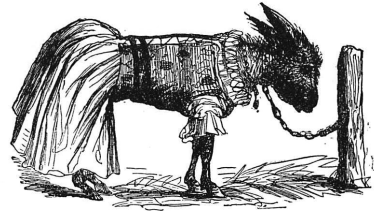
図11 第37話「鐵人」



図XI KHM136 「鉄のハンス」



図12 第4話「驢馬の甘藍」



図XII KHM122 「キャベツロバ」

きは対称的だが、馬と甲冑の類似点を明らかに見て取ることができる。

図12は第4話「驢馬の甘藍」(KHM122)の挿絵である。両者の絵には一見何も関係はないように見えるが、洋服が同一であることに着目したい。そもそもロバが服を着た姿で描かれるのは非常に珍しいためにこの絵は目をひくのである。19世紀ドイツで刊行された本のために Robert Leinweber や Otto Ubbelohde が描いた挿絵や、さらに20世紀の Reinhard Michl や Alfred Zacharias による挿絵においても、ロバは服を着ていない。

本節で紹介したのは、影響を受けたと見られる絵の一部である。しかし

ながら、『西洋妖怪奇談』の挿絵の全てが Wehnert の影響下にあるわけではなく、画家が独自に描いたと考えられるものも含まれていることも明記しておきたい。

さて、これらの挿絵の類似点からは、Wehnert の挿絵の付いた『グリム童話集』を、少なくとも『西洋妖怪奇談』の挿絵画家が手にしていたことは間違いないだろう。ではテキストはどうであろうか。Wehnert 版が翻訳に用いられた可能性はあるのかどうかを、次節で考察する。

澁江の翻訳文の特徴から

19世紀の英語圏におけるグリム童話の受容史を研究した Sutton によれば、英語訳では1823年の Edgar Taylor による翻訳が嚆矢である。しかし、「フィッチャーの鳥」はその残酷さゆえに、初訳は1853年であった。(Sutton S. 70) これは、まさに本稿が注目する Wehnert の挿絵が付けられた英訳版を指している。同書の「フィッチャーの鳥」では、長女と次女は、部屋に監禁されるが、殺害され身体が切断されることはない。これは、本稿の冒頭で触れた澁江の翻訳文とも一致している。

また「忠臣ヨハネス」においては、王妃の胸から血を吸い出す場面を、19世紀の英語版で忠実に翻訳したのは Hunt が最初であったことも、本稿の冒頭で述べた通りである。ところが、Wehnert 版においてもここは「胸」のまま訳され、Hunt ほどではないにせよ、概ね忠実に翻訳されているのである。

本節では、澁江が Wehnert 版をもとに翻訳をしたと考える根拠のうちの主なものを挙げていく。まずは、忠実な翻訳である Hunt 版をも可能性の一つとして、比較考察の対象に含めることとする。

第1話「玻璃山の魔女の話」(KHM193)では、ドイツ語で宝石 (Edel-

steine) と表現されている箇所が (Grimm S. 816), 澁江訳では「金剛石と眞珠」(澁江 16頁) と具体的になっている。これは Wehnert 版の diamonds and perls に由来するとみられる。Hunt 版では, precious stones となっている。(Wehnert S. 525, Hunt Bd. 2 S. 338)

第 8 話「骸骨が歌ひし話」(KHM28) で, 殺害された弟の骨を発見する人物は, グリムでは「羊飼ひ」であるが (Grimm S. 166), 澁江訳では「農夫」(澁江 67頁) である。これも Wehnert 版の peasant から踏襲されたものであろう。Hunt 版では, shepherd である。(Wehnert S. 102, Hunt Bd. 1 S. 118)

第29話「兎の花嫁」(KHM66) のグリムのテキストにおいても, Hunt 版においても, 女主人公の名前は言及されないが, 澁江はメリーとしている。これは, Wehnert 版で Mary という名前が用いられていることに由来するのであろう。(Grimm S. 357f., 澁江 200頁, Hunt Bd. 1 S. 282f., Wehnert S. 247f.,)

第 2 話「鬼の話」(KHM39) の「第三話」は, 赤子が取り替えられてしまふ, いわゆる取替え子^{すこ}の話であるが, 澁江は, 「此換子^{このかえこ}は不恰好なる頭と, 赤き眼とを有し, 毫^{すこ}しも飲食せざるものなり」(澁江 26頁) としているが, ドイツ語では, 「食べるか飲むかしかなかつた」と反対のことが書かれている。(Grimm S. 218) ここの Hunt 版は忠実な訳となっているが, Wehnert 版が誤訳もしくは意図的に変更されているため, それが踏襲されただけのようだ。(Wehnert S. 112, Hunt Bd. 1 S. 163)

紙幅の都合で, これ以上の例は挙げないが, こうした例が多数見られる。これらの事実から, 本稿では翻訳者澁江が Wehnert 版を用いて翻訳をしたと考える。

どの段階での変更か

こうした重訳の場合、原典と相違する箇所がある場合は、どの段階で変更されたものなのかということに注意しなければならない。

第4話「驢馬の甘藍」(KHM122)では、主人公が一面キャベツばかりの野菜畑にたどりつき、それを嘆く場面がある。澁江による翻訳では、「何か此邊へんに食ふ物はなきか？セメテひとつ一顆の林檎なりともなきか？……覆盆子いちごなりとも……其他何なりとも……噫あ々あなさけなや！甘藍はぼたんの外何もなき事か！」(澁江38-39頁 下線は筆者)となっている。ドイツ語では、「ここには、林檎も洋梨(Birne)も、果物は全くない。キャベツしかない」(Grimm S. 588 下線は筆者)となっている。洋梨がいちごに変えられているのだ。

いちごといえば、吉岡向陽が1911(明治44)年にグリム童話を翻訳した際に、サラダ菜のラプンツェルをいちごに変え、挿絵でもそのように描かれていることが思い出される。¹⁶⁾これは日本では今日でも知られていない野菜であるから、この変更は容易に理解される。いちごは既に1840年ごろに日本に伝えられていたという。

こうした経緯からみて、いちごへの変更は、日本語への翻訳の際に行われたと想定しがちである。しかし Wehnert 版の該当部を見ると、but here I cannot see a single apple, berry or fruit of any kind となっており(Wehnert S. 385)、いちごも Wehnert 版から踏襲されたものであることが分かる。

このように、どの段階で変更されたかに関しては、慎重に比較をして考察を行う必要がある。

さて、「フィッチャーの鳥」においては、グリムの原典よりも、澁江訳のほうが残酷さが和らげられていることは既に述べた通りである。長女が禁じられた部屋に入った後の場面を、ここで詳しく比較考察してみたい。

グリムの最終版（1857年）では以下の通りとなっている。

「おまえはおれの意に反して、あの部屋へ入った」と男は言いました。「だから、おまえの意に反して、またあの部屋へ入るのだ。おまえはこれでおしまいだ。」①男は娘を投げたおすと、髪^あの毛^{おんみ}をつかんでひきずっていき、②頭^あを台^{よし}の上^々で切り落とし、③体^{たぶさ}をばらばらにしたので、血^あが床^{おんみ}を流^{たぶさ}れていきました。それから男は娘^あを鉢^あへ投げこんで、他の死体と一緒^あにしました。（Grimm S. 237 下線は筆者）

非常に残酷な場面であるが、「妖怪奇談」としてならば支障はないと思える。ここは澁江のテキストではどのように翻訳されているだろうか。

「噫々^あ 卿^あは、聞^あ譯^あなくも那^あの室^あへ入^ありけ^あるよな。佳^{よし}々^々此^{よし}上^々は嫌^{よし}がるとも再^あび那^あ處^あに入^あるべし。卿^あの命^あは無^あきものぞよ」と。髻^{たぶさ}を握^あみて室内^あに押^あ込み、其^あ儘^あ鎖^あを卸^あしたり。（澁江 90頁）

澁江では残酷な殺害が描写される下線部②と③が削除され、監禁するだけになっている。ここを Wehnert 版で確認すると、澁江はそのテキストを踏襲しただけであることが分かる。（Wehnert S. 139f.）では、英語訳では、読者への配慮から、残酷さを避けるために上記引用部の下線部を削除したのであろうか。

ここで、Wehnert 版の刊行年が1853年であったことを思い出したい。グリム兄弟は、1812年と15年に初版を刊行し、以降は1857年の第7版（最終版）までの改訂を自身で手がけた。つまり、Wehnert 版は、現在の多くの翻訳が依拠する最終版ではなく、1850年の第6版以前の版を用いていたことになる。Suttonによれば、第6版を底本とし、信仰上の理由から不適切と考えた14話以外の全ての話を翻訳しているというのだが（Sutton

S.70), そのことを「フィッチャーの鳥」におけるグリム兄弟による改版毎の加筆で確認してみたい。

「フィッチャーの鳥」の第6版の該当部は以下の通りである。

「おまえはおれの意に反して、あの部屋へ入った」と男は言いました。「だから、おまえの意に反して、またあの部屋へ入ることになるのだ。おまえはこれでおしまいだ。」^①男は娘の髪の毛をつかんでひきずっていき, ^③体をばらばらにしたので, 赤い血が床を流れていきました。それから男は娘を鉢へ投げこんで、他の死体と一緒にしました。(第6版 Bd.1 S.264)¹⁷⁾

こうして比較をすると、波線部^①は第7版で多少表現が付け加えられているが、下線部^②は第6版にはなく、グリム兄弟が最終版で付け加えた箇所だったことが分かる。よって、ここは Wehnert 版の翻訳者が削除したわけではない。一方の下線部^③で身体を切断する場面は、Wehnert 版の訳者によって削除されたのである。さらに、第5版以前の『グリム童話集』の版を比較考察すると、波線部^①の「娘の髪の毛をつかむ」という描写も、第5版までは存在していなかったことが分かる。それが Wehnert 版にあることから、やはり第6版が翻訳に用いられたことが明らかとなる。

グリム兄弟は、改版の度に多少なりともテキストに手を加えていただけでなく、新たな話も追加していた。第6版で初めて『グリム童話集』に採用された話は、「麦の穂」(KHM194), 「墓の盛り土」(KHM195), 「リンクランクじいさん」(KHM196), 「水晶の玉」(KHM197), 「マレーン姫」(KHM198), 「水牛の皮の長靴」(KHM199)である。これらは全て Wehnert 版に収録されている。(ただし、この194番以降の話は、わずか40話からなる『西洋妖怪奇談』には選ばれず、掲載されていない。)

その他、初版から第5版まで136番として収録された話「やまおとこ」¹⁸⁾

(De wilde Mann) は、第6版から類話の「鉄のハンス」(Der Eisenhans) に取替えられた。Wehnert 版のテキストは、第6版の「鉄のハンス」を翻訳したものであり、やはり Wehnert 版の底本が『グリム童話集』の第6版であったことが確認されるのである。¹⁹⁾

このことは、これまで指摘されてきたように『西洋妖怪奇談』のうちの37話ではなく、38話がグリム童話を翻訳した話であることとも関連する。「グリム童話翻訳文学年表」(2000年)においても、「グリム翻訳総合年表」(2005年)においても「その他」として片付けられてきた2話があることを、本稿の冒頭で指摘した。そのうちの1話は、第25話「良人と鸚鵡との話」である。これは、第16話「倉庫を開くに唱ふる呪文」(この話は「アリババと四十人の盗賊」であるとの指摘は既になされている)と同様に『千一夜物語』に由来する話である。バートン版からの邦訳では、「亭主と鸚鵡の話」と訳されているものである。²⁰⁾もう一方の話は、第13話「悪運」だが、これは、『グリム童話集』の第4版から第6版まで、175番として掲載されていた話なのである。第7版において、「月」(KHM175)と交換されたため、あまり知られていない話だが、「ふしあわせ」というタイトルの金田鬼一による翻訳もある。これは『世界童話体系第23巻・独逸篇2グリム童話集・第2部』(昭和2年)が初出だが、現在でも入手可能な岩波文庫にも収録されている。この金田訳は、『児童文学翻訳作品総覧』のグリム童話の「翻訳作品目録」に掲載されているのであるから、²¹⁾これまでグリム童話と認識されてこなかった澁江訳の「悪運」もその隣に追記されるべきものである。

つまり『西洋妖怪奇談』のうち、38話がグリム童話から、残りの2話が『千一夜物語』に由来する物語なのである。

澁江訳の特徴

Wehnert 版が、最終版ではなく、『グリム童話集』の第6版を用いていることに注意しつつ、比較考察を行うことで、澁江の翻訳の特徴を掴むことができる。

主な特徴のひとつには、御殿の建設や結婚に際して、「吉日を擇^{えら}びて」実行していることがある。(第1話、第21話、第37話)

その他、第5話「忠實なるジョン」においては、ジョンが妃の胸から血を吸ったのを見て、王は「特の外に逆鱗^{いげきりん}あらせられ、顔面朱を注ぎ、唇頭^{くちびる}震へて、聲荒^{こえ}らげ」ている。(澁江 58頁) ドイツ語でも Wehnert 版でも、非常に怒ったとしか描かれておらず、こうした王の気持ちを表す描写は澁江による加筆とみられる。

ジョンなどの英語名がそのままカタカナで用いられていることは、冒頭でも言及したが、日本名が与えられている場合もある。第8話「骸骨が歌ひし話」(KHM28)の二人兄弟は「甲蔵」と「乙吉」であるし、第1話「玻璃山の魔女の話」(KHM193)では、たいこたたきは「須川純吉」、王女は「雪姫」という名前である。第17話「蛙王」(KHM1)では、王女の名は「舞子姫」、忠臣の名は「逸見利久」とされている。「逸見利久」がグリムの原文では「ハインリヒ」である他は、どれも名前は付けられていない。²²⁾

本稿での考察から、グリム版と比較して、『西洋妖怪奇談』では残酷なところは弱められていることが分かった。しかしその多くは英語訳に由来していた。そして全体的な内容のみても、タイトルが期待させるほど恐ろしい話は掲載されていないのである。このことは澁江自身も意識していたようだ。

例えば、第31話「金鍵」(KHM200)は、少年が鍵を見つけ、続けて発見した鉄の箱を開ける話である。グリム兄弟が初版以降つねに最終話とし

て置いた話で、開けられた箱の中に何が入っているかは明かされないことで、最終話であるがエンドレスでユーモラスな話なのである。この「金鍵」を澁江は第31話として置いているが、その末尾には、ドイツ語版にも Wehnert 版にもない次の文章がある。「散史曰く、此一話は前の「嫁の擇ひ方」と同じく、日本流より言へば、妖怪談とは受取り悪くし。然れども、暫らくグリムの原書に従ひて、之を存す。」(澁江 207頁)

こうした言い訳めいた文句は、ここで澁江自身も指摘している第22話「嫁の擇ひ方」の最後にも置かれている。この話は、本稿で挿絵を紹介した話で、男が三姉妹の中から最も堅実な娘を選ぶ話である。さらに、第35話「伶俐なる庖女」(KHM77)と第38話「七名のスウェピア人」にも同様の弁明が記されている。どちらも笑い話であるためだろう。後者の「七名のスウェピア人」は、本稿で挿絵も紹介した話だが、粗忽者の七人の男が川で溺れて死んでしまう様子をユーモラスに描いたものである。その終結部に澁江は「河童の餌食となりしか」(澁江 252頁)という言葉をつけ加え、いささか強引に妖怪譚風に仕立てあげている。それでも前述の弁解がましい文句を最後に置いていることから、書名と内容との不一致に苦心した様子が窺われる。

おわりに

第13話「悪運」の最後には次のように記されている。

懶平らんぺいの如きは、眞に不幸の極といふべし。然れども斯の如く悪運に魅入れらるる所以のものは豈あに其因いんなからんや。苟いやしくも其因を除くを得たらんには悪運は必ず驅逐するを得たりしに相違なし。少年諸君は切に此懶平らんぺいに鑑みざるべからざるなり。(澁江 96頁。下線は筆者)

これはグリムのテキストにも Wehnert 版にもない文章で、澁江が付け加えたものと考えられる。ここに少年諸君と書かれていることから、『西洋妖怪奇談』が、子どもをも視野に入れて編纂されたことは確かである。また巻頭の凡例にも「児童に解し易からしめんとを期せり」と記されている。ただし、全体が文語体で書かれており、²³⁾表紙に「小學講話材料」とあることから、奈倉が指摘するように「先生が話して聞かせるための補助教材として使われていたもの」²⁴⁾なのであろう。グリム童話が、子どもが自分で読む課外読物として使われ始めるのは、大正時代に入ってからで、それまでは主に成人知識層向けに翻訳出版されていたとみられている。²⁵⁾

概して明治期のグリム童話の翻訳は、英語版からの重訳が多かったのだが、『西洋妖怪奇談』もそれを裏付けている。

19世紀の英訳本は、当時のイギリスの価値観を色濃く反映したものに変わ容されていたため、それから重訳されたものに飽き足らなかった金田鬼一が、ドイツ語から直接にグリム童話を全訳することを決心したのである。それでも金田の全訳の完成は、1924（大正13）年（第2部は1927年）まで待たなければならなかった。

本稿の考察では、残酷な「羽郷の處女」（「フィッチャーの鳥」）において、その残酷な箇所が削除されているのは、澁江の判断ではなく、Wehnert 版を踏襲しているからだということを確認した。Wehnert 版も、他の英訳版と同様に、19世紀イギリスの価値観に従って書き換えられたものだったのである。

翻訳書のタイトルに「怪談」という言葉を選んだ澁江だが、もしも Wehnert 版がグリムからの忠実な翻訳であったならば、彼はどの程度残酷な箇所を残したであろうか、このことを想像せずにはいられない。

の研究成果の一部である。

注

- 1) 川戸道昭他『日本におけるグリム童話翻訳書誌』ナダ出版センター、2000年、127-218頁。133頁参照。川戸道昭「グリム童話の発見——日本における近代児童文学の出発点」前掲書所収5-50頁。48頁にも同様の指摘がある。
- 2) 川戸道昭他編『児童文学翻訳作品総覧 第4巻 ドイツ編』大空社・ナダ出版センター、2005年、708-738頁。709-710頁参照。
- 3) 村岡功「澁江保の事蹟」『鷗外』第72号、森鷗外記念会編、2003年、1-35頁。「博文館より啓蒙書五十冊以上、大学館より探偵小説類五十冊以上、三才社より五行易断など」(4頁)があるという。
- 4) 川戸道昭「グリム童話の発見」川戸他 前掲書(2000年)7-8頁参照。
- 5) 厳密に言うなら、200番までの番号が付けられた童話と、子どものための聖者伝10話が収められている。
- 6) 慣例に従い、『グリム童話集』の各話の初出時に、最終版(1857年)での収録番号をKHMとともに示す。『グリム童話集』からの引用は、Röleke, Heinz(Hrsg.): Brüder Grimm. Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand. Stuttgart (Reclam) 2003(一卷本)に拠り、本稿では(Grimm S.10)等と略記する。日本語訳は以下を参照した。野村法訳『完訳グリム童話集』全7巻、ちくま文庫、2005-2006年。
- 7) 『グリム童話集』初版第一巻には62番として掲載されていた話であるが、フランスのペローの話と良く似ているため、第2版からは削除された。
- 8) 幸福散史澁江保訳述『小學講話材料 西洋妖怪奇談』明治24年8月、博文館。ここは127頁。以降、本書からの引用は(澁江 127頁)等と略記する。
- 9) 野口芳子「イギリスの影響を受けた日本のグリム童話——最初の邦訳本と英語教科書を中心に」『昔話——研究と資料』第38号、日本昔話学会編、2010年3月、22-35頁。Paull版とは以下の英訳版を指す。Grimm's Fairy Tales. A New Translation by Mrs. H. B. Paull, London and New York: Frederick Warne and Co. 1872 (1868). 刊行年には、1868年と1872年説があり、野口は1868年説をとっている。
- 10) Sutton, Martin: Englischsprachige Rezeption der Grimmschen Märchen im 19. Jahrhundert. In: Brüder Grimm Gedenken 12. Hrsg. v. Ludwig Denecke, Marburg 1997, S. 59-77. ここは S. 65. 本論からの引用は、以降 (Sutton S. 65) 等と略記する。
- 11) 『女學雑誌 複製版』臨川書店、1966-1967年。
- 12) Paull版を翻訳したとみられる『西洋古事 神仙叢話』においても「夫人の肩に針して、悪血三滴絞り取らハ」となっている。桐南居士(菅了法)譯『西洋古事 神仙叢話』集成社書店、1887(明治20)年、55頁。同様に、橋本青雨による明治39年の翻訳でも、「懐から小刀を出して、左の胸から血を三滴取り」だしている。ここで

- も胸からとなっているが、口で吸い出してはいない。橋本青雨訳『独逸童話集』大日本國民中學會藏版，1906（明治39）年，72頁。
- 13) Grimm's Household Tales. Translated from the German and edited by Margaret Hunt. London 1884. 本書からの引用は、以降（Hunt S. 65）等と略記する。
- 14) 本稿に掲載する挿絵は、全て筆者の所蔵する版からのものである。筆者が購入することができたのは『西洋妖怪奇談』の1891（明治24）年初版および次の英訳本である。Household Stories. Collected by the Brothers Grimm. With two hundred Illustrations by E. H. Wehnert. And thirty-two pages of coloured plates. London. George Routledge And Sons. Broadway, Ludgate Hill. New York. 刊行年は明記されていないが、1900年前後のものと想定される。Wehnertによる挿絵付きの版は、ロンドンで1853年に刊行されたものが最初である。
- 15) 翻訳者名も不明だが、Wehnertに関しても生没年の他には明らかになっていない。Sutton S. 76参照。Zirnauer, Heinz: Grimms Märchen mit englischen Augen. Eine Studie zur Entwicklung der Illustration von Grimms Märchen in englischer Übersetzung von 1823 bis 1970. In: Brüder Grimm Gedenken. Hrsg. v. Ludwig Denecke, Marburg 1975, S. 203-245. S. 215-219参照。
- 16) 川戸道昭他編『明治期グリム童話翻訳集成』ナダ出版センター，全5巻，1999年。第1巻 274-275頁参照。
- 17) Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. 2 Bde. 6. Aufl. Göttingen. 1850.
- 18) 金田鬼一による翻訳がある。『完訳グリム童話集』第4巻，岩波文庫，1979年，146-152頁。
- 19) 本稿では、第7版と第6版のテキストに異なる箇所がある場合のみ、それを明記する。
- 20) 大場正史訳『パートン版 千夜一夜物語』ちくま文庫，2003年，第1巻 147-149頁。
- 21) 「翻訳作品目録」川戸道昭他編『児童文学翻訳作品総覧 第4巻 ドイツ編』大空社・ナダ出版センター，2005年所収。693頁。
- 22) 第29話「兎の花嫁」ではWehnert版でのMaryという名前に従って、メリーが用いられていることを指摘したが、Wehnert版に名前がない場合にも、澁江が名前を付けている場合がある。その場合、英語名、日本語名どちらの場合もある。
- 23) 澁江の訳文は、「総ルビ、しかも漢語は「重病」が「おもきやまひ」，「臨終」が「いまわ」というように大和読みになっているので、この時期のものとしてはかなり読みやすい方」だと評されている。鳥越信『大阪国際児童文学館蔵書解題』大阪国際児童文学館を育てる会，2008年，42-43頁。ここは42頁。本稿では、ルビは適宜省略した。
- 24) 奈倉洋子『日本の近代化とグリム童話』世界思想社，2005年，ここは26頁。
- 25) 奈倉 前掲書 26頁，36頁。